稿葊漫筆

三

陸
6
三

イ 5
348
3

門1曾5
號 348
卷 3

東京帝國大學圖書之印

文教

東牖子卷之三

本邦の人乃性を実に潔白なる君子國なりと清古の人も及
ばざるなり殊に神明よ婦乃産ものも也く
乃ものなわるもどるり醫薬方書の類を人るる小房術乃
毒薬をん病と記者有て主治術を揚強論あり方
を著るの許多出せりそれ邦の人らして何程妻妾の
美と富とを人も邦愚頑なるやをしく病と求るこれ
者有ることを学び奥味を人とは少けし俗用よいるがわく
一條をん第を汁て知るべし飲食男女の道人欲なれど

東京帝國大學圖書館藏
坪内雄蔵氏寄贈

○孔孟の道と学ぶ者を聖人亜聖の百分の一にも成て能
たまさら詩文乃辛才あるひは博識洽聞の才ある人といへども
云ふ所一致の右に稀し和歌と学びて貫之躬恒の域に至
書を学びて義之松雪の世界遠しるは全道の学に成
りや云事純然技に成りてもなほ猶狸小方と縁の如
働く所に勝者出ずしたる道のいまだ成てもなほ
又七年十年寝食をも忘れて博古の功を積ずして師に
及し能はしたく学の業の中に出須臾流行を
洒落に加ざりて志しと所を求て学ばしたく学ハ
自己獨立して容易く上達し出藍の徒多くそや唯

いかに技術のくわしく達しとなれど今流行とる物ハ古の
洒落に道と美よせしたの歌今所道分に上達とる物
も洒落と色恋と変歌の歌より行とるもの愚なる歌と成て
此感いかに成しても解べ
○茶道を和して狩どと懶惰ハ書色に今の洒
落を狩く和せ次志ハ小人の行にして道に志有ん
人の避べきみちを
○戯作堂の法帖に唐人の書して茶書を出せり者より
淡くしや廣澤の模鸞百潭ハ漢の孫しよ
千ぐ文の友沿道に近き高貴寺の墓を大和上の賛に

あるは寺へ行ことも諸所の席に戯鴎堂の法帖の話を
せしに唐人の書は読がたきよしを語せしに沼道師のいはく
よく戯鴎堂の唐人の書は百法海の内にて語なりと直に
読もて流石の法師なりとて暫く是はこれ道に秘し事
筆物を読しとて能くたどりし廣澤子の真蹟の才にかなはぬ也

○芸妓の唱ふなる山姥といへる妖謡ありその節拍子を
法有く鼓の三拍子に合り故に一曲の調子を拍子ととりて謡ふ
其の謡によく聞ひ出しより間のそれ拍子も切に初中終連続
志く其地に合ね紀州の人の節拍を付けしとぞ妙之丈鼓の
三の地ともに三分損益の法よりしてなか勢ありても左徳太子秦川勝

は数をひし雅楽は原の拍子なりて九九の黄鐘の数を損益
しても黄鐘の五七合く十二音となる是を又三分の一を減じ
八ツ揚る之此八ツを十二云の内へ割込で打を両張滴拍子と云
又八ツの内れ二尺六の浪数を省え浮弄を偶の間拍子を
大小鼓にて打これを取此と云之唐尺と称て番匠の用る
法を足武すの内へ八ツを割付しも三分損益の法よりいで
ちり年天王寺の伶倫図豫州なる人に乱舞の法を
せしに三分損益の事に及べ豫州不審せしと謡曲にも三
分損益の法有やしと問しよりかりより此次第より一番の関
まで拍子を合せ見せしに豫州慨然として雅楽の拍子

も是を出ぬとやうなりてうれらべ妖婦の山姥を雅楽の律にも叶ひて名を板にかく損益の澤を京所の儒生勧学氏の編ける春曲に石岡云しに書ありしに妻くあらうせり猥曲のた原を正し大に無百の書なり玉園集の花見物小舟

○京所へ出る若使小朝と称とりとたしくて飯堵の丈限る太さくらべわくそれ浪の小朝なる朝の中にて紅糧なり年始に用る射馬小朝を常の朝のよりり小朝なる俗ら陸奥と云州のものは大に相違せり西堀にて京大坂小朝と称とる紙に書る朝のよりして小朝なるべし若梅の人をいうと

○車の輪を七に極りたるものを西京にては西法とうそしたる板の車に著せるを西京にてはうくるを盗これは西家に乳の附りねなるべし此不変のお湯七の数に法花経百部を写ること紙人鬼やぶ集の名に七車と有り是を七つとうつるとうり号なるべし此七を数なるに涙例とうり

○油瓶に万級の月行に米ふ米能人のいくるふて流ども唯子く鑑ふものを乞人文よるし金千七三流月行となるもの初しば是を紀年人る求しるふ初人ぶりしに和州郡山の梅海といる彫工に尋しに北海

いとゝく先大きなる帖帙をかゝして行の間行〻鞘の板
より彼員行完〻必ずこれを用ひるゝに濕せば用
行のゝゝるゝふしゝと長〻き制を道とするゝ賢しゝ支
老圃〻與〻とは冥〻
○文祖の書を志と等閑ゝゝ石塔の苔をも拂ひぐる人も
枇杷が書を志ゝ勅めゝ割ゝる斗の石鉾を撰して建〻
宝殿の書さへ行写の書を結しゝ毛生産の大なるゝ紙の
跡の命日ぐも宝人も芭蕉塔〻厚く施入と点者もて〻
ゝゝ石鉾〻與とゝ也り紙ども六十六部の同国者が供養
宝篋印塔の人工を費せゝ迚及ばゝ次

○字を用ひるの異なり隨分漬だゝ漢ぐるべ用ひを安〻
殺ゝ紙書ゝいとゝ人の筆跡ゝ本ゝ漢ぐ書
勢なり義之が花の字自ひなくゝ昂ゲ大の字小の用
とゝ書ゝ七支未満の小兄の字も大の字ゝ爲
迚も通用次第手文〻恥ゝ宜ゝ石漢ゝて用を
ゝぐるハ恥辱ゝゝゝゝ花のいゝ紙どゝ唐を動
せり人服ゝて書を見ぐるゝいゝん
○衡宗風絶杜係損の文字許多あり連歌の書ゝ
新立家文字ゝ行ゝ紙ゝ行ゝ中世ゝ和
舞ゝて仏の古実ゝ紙ハ都ゝ今の書ゝ門

世德
盈

千緑字書と見ざる左り約束あをこと千緑字書八頭部
の頓函にして接て和刻せり是を見て日本紀の極家乃
こそろ〻と板家物新五家と云ハ侍ゑり代〻連歌の家道任
せり故よ元の中元を彩社家家道に孫ゑ此家と今或御所と
なりぬ之須歴斗月師も住せりしとぞ今も拾の上史
蔵の標札よ彩社家御歴斗月師と書ろり
○氏家を建るよ大黒柱と云物有元来此柱より棟梁を
定むるなり是ハ大極柱なりべし 古来名の正しきなり
今和州の工匠の中よ大黒柱と云ハ一向
知ぬよ拾ゑり

○遠棚袋棚と云ふ物今世ハ潜して氏間と設ける家あり
元来遠棚を用ゐを客の家よ設ける物なり客有て正堂ハ
八茶の上元客乃冠を上の棚よ置て烏帽子ハ下の棚よ置く
乃ハ設ける物なり袋棚と云ふ又恐れなくもよるさ
物をのぶる棚なる金枝玉葉の止んごとなき御殿よ設ける
そのゝぞ天子常の御棚なども錦の囊よ入る紙袋の紙を
なる紙袋と云れるべし それを天子の御のゝ上元御清史頭よ載て御手あ
なる設せし方ゑ袋を後れなく袋棚よ入るゝとなる
故よ冠烏帽子の棚より袋棚を上よ有ゝ蒐樣御紙の御
南殿の階上の棚よ御史二方出まんとれをゝ古まんゝ

らく波法史方ゐてとて板足利家系都の御所をこそ
をしようこそ氏混じ遠渕袋物をあくしの武家を後ゐく
より絶よ僧して氏間よ級ること行半ぐや袋物へ書四の
紬物と白砂糖の相借屋しること遠ぐるよ系のをくく寄乃
多ゐ氏家をこ思くを行る寄ゐ世をは長ゐ急ひの法法物のと
を巻の拾ゐを兼器ゐ寄ゐくひで海ゐたゐ絶ゐも法勢のをゐ
をしゐこと法ゐゐ者流号を奉ゐゐ六ゐ二の御猶号のをこ
しゐ寄田の関白初ゐ法真流と法ゐひぬてゐをゐ法
足利家氏家等持院と法ゐをこれ武家流号のけゐあゐり
今や氏間よ方ゐゐる者を戒名のを流号を冠しゐるハ

けしをゐ法ゐけゐ
武弥紹酌袋物の制肯を志弥家流よを猶墨ゐれ
をのをゐ行よ法ゐをものゐ法ゐを志弥物法物の
内なりしゐや勿海中豊の袋物とハ同名実物ゐり
多田南嶺これを混じていハり獨歩肯宵のをゐをど
英雄人と数くの法のゐ法ゐ老法通法と変名せをを
しゐ絶老屋ゐ杜鵑をゐを
遠物よ血流ゐしをを法肯ゐ法ゐも焯
しゐ肯ゐ家をゐ法
○蔑ゐ身をたゐゐる法の不法合ゐを白を編紀義法志と

いへる洲人の獨今十百餘の中の白こ海内よりあつまる賢愚
皆偶人なるあるなこ然ども白者と知る人まれなるべ家よ
ちうん洲志八信德の門人信安の半ばにして京醒井ちう辻
人なり寶暦の初世故せりとも此時半の者白れ南白こ示ふ
白附の集よ再出せしようう流布せり
○澤亭の燈をヲヂヤレと称ぶこれ沖山者の淫祀せしこ
鄙しは酒爲の移るり洲るよ浪花瓢箪所の色廓し岐部よ
六字分ちぐく号る須城ありり契價とれ品名をちるこ酒さ
畢考尾繁るりこれよ對とるとヲヂヤレを古雅しして酒爲
なり嶋原大坂を商賣福湊し他よ変せり

○こ世すは菴治くくこそ洲人ありえを浪花の産ふぐ
久しく東都有しぐ京ふもしふこ文ひうう長生庵
紀藩しこ洲人出来して大ひ治くこ紀渭わしこ一ぐ丈
よ第して寸法治くこと波月出変ぐくしの長寸ひよ返て
さしけるさちんこ名のいかてあるくこと名を変京師乃
年月を経るうし 祇園業水の近よ塾しして一味を絶倒せし
世今狂英邁の才有くようく人と模仕せし受粗人の受治る
変なりこ浪浪花よ来く貴樽も海成ぐの寿を極む
京師の間小販處しさせる半ふこ物と変紙治ふぐ称
こ後門外こ立の秘しして

梅花とよみていふ梅花
といへるを詠さし京極の宗匠よみもして工夫をせしむ事が
十才の述これも秘せし半生人に後を世まで活も比奴便
崇中と半ば居升中右京が初名のしれ縁りさ家に其後秋
至席といへる謎人あり生涯雑謎を点せしが謎学の博物なる
よく吟味せし人なりし老人鸚鵡の須と折衷しに語しが
物故せらし後墓に消しふ禅学に梅二本をうゑるを也とまし
ふると碑に彫付けりこれを見て初く詩しが梅花のる解しより
禅をと同音でるに比喩して作居士号之のれで同しくれ
苔日宵光のくかしむかしのうるかぞげらひと知らし然し

を識納太仲なるが卿らし文人情をよく京る男も活梯子云
ふるて己が歌を並べてのぼりしと
一着麦二首にて紙に芝居　又須城　六歌七歌八九歌
おぼく其の歌を延の的とさして己が好しろなりと人を来
物せし　横着者なり銭内して点式に青漆の肉を用ひ八
比老物しとや家の印式を祇南海の篆刻ならしが後
に妄し應持せらくより
○道祖の神号と清士の神名なり風俗通に黄帝の子相
竜又ら累祖と孫とはたは孫に与径を好みて道路に死後に
まく行者は祖を宗めて福を祈る是を祖道とい云へりと本朝

李興氣畫

してら猿田彦命と幸の神さま〳〵濟さま〳〵塞べ道祖の神
等を祀れるなるべし
○ギボウシ〳〵へるこの綜の條そこれ原来葱莖なり和名抄に
葱莖〻とうきバシラ〻紀せり葱帽よりなるべし
擬宝珠の擬の字こゝ當せば元来佛種の五辛と禁給ふ
葱をすきるなりの〻板よりてこれを釘の古風よりこれ葱の用
らる〻半多〻〻先親王宣下の時糸肉のふ葱の白根と樊
噌さ四方の真菰て糸肉〻給人古実ありしとぞ往葱莖
の風聞そこの葱はて強〻の古実ありし擬宝珠の字は何
も傍かた強字なるべし

仏卿綱目に李時珍の曰五辛菜を元旦立春ふ葱蒜
蓼蓾芥辛嫩〻菜と雜和〻てこれを啖へ迎新く
菜とこれをいふ半盤〻〻なり和漢葱を
右例より用ふる半ら切〻
○今世俗服に用ふる濃黄といへる色は濃青〻て黄色な
らびこれも元と濃葱なりしかや古来物を号ること皆
ふ質実〻〻く梅皮色本紅色ふ〻〻新〻号〻て濃葱
りしに萌葱の濃さ〻ふ云ひ〻せり花色〻て桃紅雪
白の花の色ふ〻〻是より郷野跡花のこゝ〻
濃〻なるはもとの色とん花色と号んやこれ正〻く

縹文の紙ぜーこ淡黄の帽子と花のがうしこそ為繻
おれどこれも縹の帽子ぜーなりべース家浩い紫の緋を
奪ふこと出と今の江戸紫の色とは大ち異へこと字も書紫い
ぬ絳繻こと有見べ紅繻こ紅くまこたり赤注ち紫黒紅
こと有又紅紫赤こと字を列ねて書ろう紅と赤とのはに紫
と挾こて書ろう是をんん考ふべいふーこの紫と今の紅紅の
いろれどこーこれどこて朱を奪こと言い有なり家浩
のきを俗人の仁者ふ紙ぐるを憎先ろ是を紙て紙ろる者を
渭こどなんどは江戸紫のこれどこれ物紙を奪だけんや是
よかぐこ沒名こ反せるこの淡黄花色ぐこをんぐべーー

○紅とこれるひこと云るい元呉の国より渡こて藍の種をんふ
やふいこーこを茅葉ち絹を染る物の名をあいこと称せーふや
いどを呉ろう渡こーー藍少くれのあいこも濃呉藍こも
云来れり又縹色紺を深る藍紺をこ山藍ここ云ふこ山藍の
性ここ云い濃縹いろなり又二藍ここ云ふ呉藍ここ山藍こを
二度和ーて深ーー色こて別に法以下の小袖の色こ桃花
藁葉ち見べころこれを是紅こ俗よいころ是紅の水引を
二藍のあ引こいへるもこ藍こ呉藍こをわせーー物かこ
○ふ茅方木あるこいふる葉みる緑ぐ有り是をもれて
天地の道のぶーこと推ぐべーー天と文なり地と母こ天地交

養して万物育し獨活幾せん獨湯をてんぷに種を
蒔く生ずるハ母の養なれどこ貧なれ下に苗を植て生ぜざ
るもこの育おけもでこ今これを田圃の種を蒔ぐ生ずる
地の乳ゆして産れ出るもべ土のかく黄なるゆゑ貝刻兼
のもいろ黄なり漸生ずるもこの黄色を染て
地の黄色と和して緑色をなるもしたがて緑色なるざ
る事本の兼一致しかし〜ゆゑ兼たのごとく海湯の乳
兼ゆ染るもの色を変じ又若と実を内より湯乳
ぞうり変して海乳を染じ湯の編乳を染て満盛るゆゑ
久しくして枯枝葉塗と物理ゆゑ〜嶋中理ゆゑを悪

を編ゆゑ理を窮るハ稍編ゆゑ理ゆゑハ二百五十餘日の廻
り合せまりしゆゑ今の古ゆゑハ年再閏して英用合くやる
稍ゆゑのかるべし

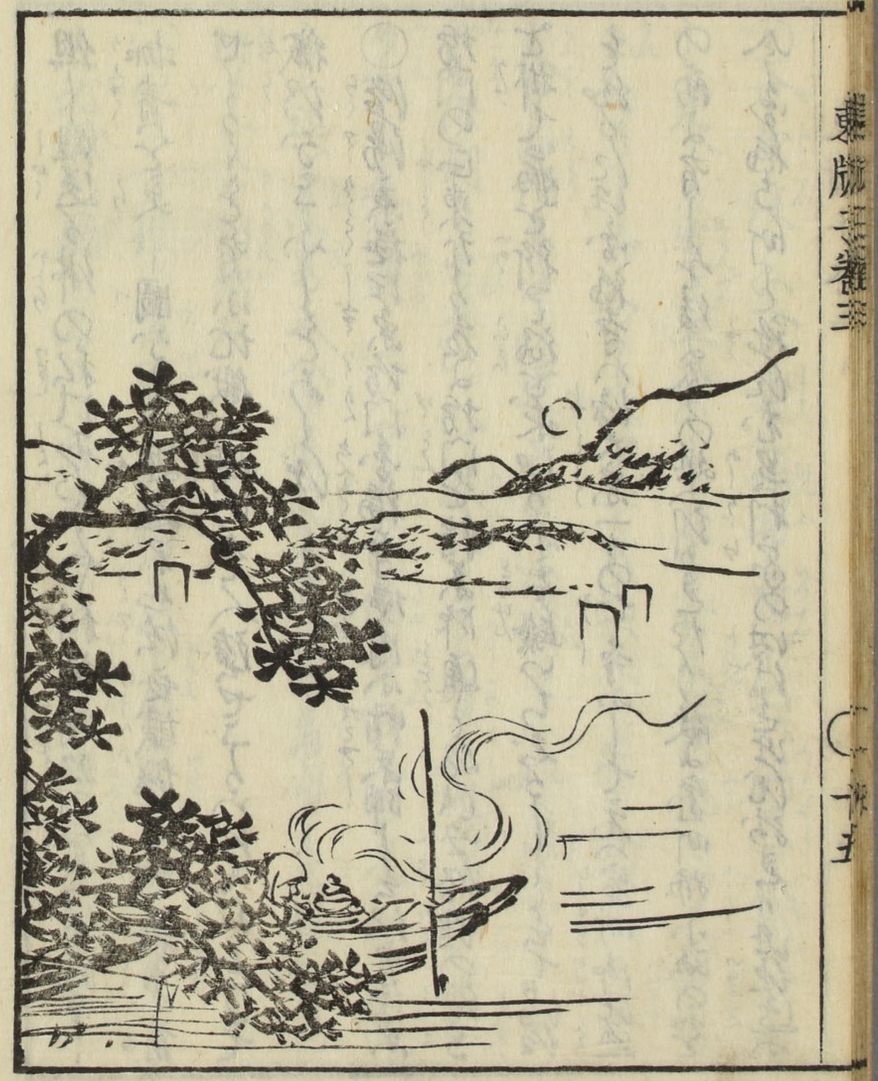
○天ゆゑ地の右旋は是天地の紀則ゆゑ天を日月
星辰東より西へ巡り地の投万態みな西より東へ沈
ゆゑ古ゆゑ韓より初て物を渡し三渡東より船遠
庭よりして往来ゆゑ今河の水泥ゆゑ沈る
全地の右旋ゆゑ自然ゆゑ天の樞ハ北辰ハ
ゆゑ動ゆゑ〜寶邦より年毎の船本して衆生の拱
ゆゑ〜豊考に園ゆゑ〜

○世事淡しとへる書に絹布麁なれの鞠天さん弐文六人
と定むる寛文五年の事なりなる世の風に六貫ふることと
半たりしが去る頃弐文と弐文六人と定むるもしへ元明
天皇和銅年中の定も寛文の制をこれに遊ぶるこそ
必ず法制と云ふ人は服法なる貴長能の所制に非
ずのみ是を強しでんやを匹の絹貴人の所を人の制に戴
を一匹と実書を人を反宛に庶民ら着用と匹配匹夫の
新り変り消なるよし

○仏の方便の寓言いと深きれなること多し
先比獄の圖を見るに婆羅王の不直を法の命の事は愛ら

但し往送る佛の私れ為りや剃髮僧侶の冥府に渡し
拘責と云し圖ふし近邇不仏法毋獄魂ら斬罪条首
せらるゝを有ふ比獄に僧の老人陸せざるいれも私ふして
獄ふるふふしとあり

○洛陽京極に条坊門寺福寺境内に蜻蛉師と云仏有に東
坊門の西東なる為に坊門を蜻蛉作通しなび世俗蜻の繪ら
を掛て病を祈て福を求しる小者験いらむるしと云て福を
と祈るに法寺福寺八法古宗一ケの女寺ふして元八室町御所迄
の南に有しを後に今の延引をたり故に室町殿小路の西を
今多福ち所と称し尤世利家の時代に比比迄ふ



蓼江邊

有し茶師左澤茶師と云称じて蛸茶師と誤まりて愚俗
蛸の画馬を掛るに必来ると是を流傳し霊験のありとお
ぞめ来り聞務に違ひて寺僧も幸志ある人を按摩院
し給ひ入ものハ押小路南は姉小路なり去る在にひらしハ
姉小路の此池の側に汁造家居せり汁屋新作家に姉小路の
汁といへるもこれなり又後池の側の汁造大津近江の方
大谷山の麓へ居を移して今猶池の側に汁造を業とする也此
在之いづく長門の筑丹後備明石縮のたぐひのごとし
○世俗貴賤の差別なく羽織と称する物を着く是周太
麿の趣きん様ぞる小兼久の云れの後公卿大夫に窮なひて衣

服調度かゝる事は延暦の初より分て車馬とも公家に随ひたる衣
冠束帯の諸方も出仕し給へど晴の服に差殊の紫
らん〳〵といひしより衣冠なとの上へ明衣なとの服をと
張出仕し給に道服と云されの表の比より折
てもち給ふ故服折と称せし服ハ身に服る衣の惣名にて
呉服を入れたるとも云も倉の羽翼をそへて別しみる身に
被との称あるて羽二重と云も御召縮の表をとへ恒の綾を
二つ合せ織しぢ元緒と云称る服二重あるて献上には文
掛の名有がごとし　陣折羽織の諸説多けれと俗用
縦し被いりしへて得衣素袍斗成て奴袴とる多の類を

ゆるがせにしるべきなり 故に両家の和歌
肩衣ばかり袴をし裏れば袴実袴とて袴ばかり袴を持流
号氏に服折に袴を着とるべきを初めひしゃ陪膳のは
服折をきるべしとかや袴ばかり着とる袴を袴ばかり
しるべし一向門徒と迄折敷下の雛まうるべき肩衣ばかりを
着せるべし浄土折敷とは道服のごとしと矣べし
異見の儀を敵に初めまでれば敵にものとりやまさ
氏間ふ袴ばかり服折をきるべきなり
の袴ばかりしるべし
○着の文とは板ばかせ書わり 道明寺家 これが証拠とも

無益の費は方便に有 僧侶の費と又義に成の費は
深秘に有とを述べ費をして物を
拵ふに成る乃無日本古を深秘とるべし 所詮実
縁に初て見へ侍るとて灌頂深秘に有べく寄家のもの
とも見る所を無仁と後の悪智なるべき
○和州郡山の茶毘所の地名をライシヨとて郡城の東
半里斗小有是旧都の羅城の跡なりとやとかや
辰の市つ西東九條西九條ゑびく云村有 古間の清水も今
よりとうライシヨハ羅城の跡にわ遠かるべし 今れ京
良と旧都の跡とのをくとて邦内換くして云紙ひと

されバ八宵百首をよめる地なれバ伊勢物語ならの京春日の里にしるよしして書もてりとハ東の条ハ白川ひんがしの八条なるこのたぐひなるべし東大寺西大寺の中を禁闕となしもじライシヨ辺朱雀通りもあるべし故市井と云る首ハ和漢ともに市中村落家毎に井を設ず一丁一所に井を設朝毎に周里の人井のもとよりて水を汲ひ人の聚る所より旅ども爾を雑貨を持よりて交易を依て市井と云よし万葉ふ辰の市ハ毎の清みと詠まるしも宜なるべし
○いにしへ児童のなまびける者を寺院へ行て学びしハ友今童蒙の書家を寺と云寺屋と云南都にてハアゼチしと云て寺と云ハアゼチハ菴室の称せし也旧都にて寺と云ことハ興福寺をさして云故に興福寺に対して外京の寺も外りの坊も菴室と称し在之頼政の祝に寺しの宇治との名りそしと祝ハ云ハ云井寺之足ハ叡山とぞ云しと云井寺をはしも外ら例に興福寺と寺と云
○唐の孟浩然が詩に春眠暁を覚えず處〻啼鳥を聞く夜来風雨の声花落ること知多少と云を誦して曰孟浩然盲目なるべしと次繍縁に出せり東坡蘆縁に登洞の詩を云辯と詩話にハ朱猫の詩を云など同日の譚にして清士の文人能醜きを云しなりの人なりもあし

○同七云古詩式然白頭翁しゝゝ白中に流陽女史情紙
色といふゝを小野小町の云り面紙のかりゝゝでなのにされ
うたゝひ命よりうゝゝ絶ゝ一ゝ絶ゝ化乃
よをおもふ様より自己の紙是実ゝ切なゝ又ゝ射ゝ
以逸為花長歌是しゝゝゝゝ白ゝ小町はゝよ花の色ハ
うつりにけりいたづらに我身よのゝゝ才学小ゝ森田やゝ中ふと
よゝゝゝゝ成絶詩ゝ切ゝて感慨深ゝゝゝ
劉廷芝の作ハいまゝ月半ゝ渡ゝ洲白氏文集渡ゝ
云し実ゝ白氏文集ゝ白氏長慶集の半ゝゝと
うや清女の枕草紙ゝ文集といふゝ長慶集なりとゝ

文集をゝゝゝ流ゝ渡ゝ一ゝゝゝや何ゝ意ゝあり是小町ゝゝ云
ゝゝ文の官ゝ一ゝ上篇ゝ渡窮寵ゝ園秀ゝゝ沈ゝ小
説絶ゝ盛唐の才ゝゝ精選の佳作ゝ採ゝゝゝの雪
ゝゝゝ実ゝ歌紙ゝゝゝ今の詩人屋古歌人ゝれゝ
をし
○同桃樽の歌伯の詩ハ記るゝ月義馬帰嘉備文ゝ有て合
ゝゝ夜ゝ尾ゝ到客船ゝ云左初ゝの人ゝ一意ゝ解ゝ絶句
歌なゝで大体氣持のゝれ絶のゝゝゝ小亜ゝれの白を
ゝれゝ歌七ゝゝゝゝゝゝ云歌ゝ解ゝゝゝゝゝれゝ七日
八月ゝの月月の歌ゝ月歌馬の峰ゝ人景月ゝゝ月ゝ

これを青雲の霜のいまだ虚空にとけざるごとくなるべし
こゝ場に遊ぶこゝ情に一なり詩に云ふ深根なく好
情を云はせし物なるに云ふ詩に云ふ人の先
和歌を嗜ましく御ゆく詩を学ぶべしたゞ元
清を見るに元来文邦の風雅を学ぶの人乃書物をうしは
たしくて惣入歯の無人ゞ踏をはりに詩しくて人の詩
歌を学ぶべしらくの一首も学ぶべし歌を詠ずるを詩也
たゞしいまだ詩ではなくして九文を学ぶべ

東牖子巻三終